

歴史文化保存展示施設で行う活動内容について (活用部会)

作成：令和 3 年 4 月 19 日

トータルメディア開発研究所

1 活動内容について

別紙(案)のとおり

2 主な意見について

(1) 活用の基本的な考え方等

ア 学習スペースは、展示を見て吸収したことを落ち着いて考える時間が取れる場所、また学校団体などが集まれる場所として必要である。

イ 館運営は多くの人の支援が必要であり、市民ボランティア制度も一つの柱として検討していく必要がある。

ウ メインターゲットは小学 3・4 年生ではないか。ワークシート等を作成する場合は、小学 5 年生向けを想定して作成すれば、難易度についても大人、子どもいずれにも対応できる全般的なものになる。

エ 活動内容のボリュームは多大であり、学芸員への負担は避けられない。このため優先順位を決める必要がある。

(2) 学校との連携

ア 学校連携は学校側の狙いから外れないように、密な事前協議が必要となる。

イ 学校利用は一般的に、館で学習後、学校で感想文というプロセスだが、学校で事前に学習し、学習した内容を展示であらためて学ぶ等の逆の発想も考えられる。

ウ 子どもたちが手掛けたものを展示して欲しい。子どもが学習した内容を壁新聞などで活用すれば、親子で訪れる機会となる。子どもたちの活動が見える場所、地域に根差したあたたかい博物館になればいいと思う。

(3) 未就学児について

ア 未就学児へは直接教える必要はなく、楽しい場を提供できる

と良い。そのうえで未就学児を取り巻く家族等へのアプローチも大切である。

イ 石見神楽は、お囃子の音など、五感で体験できるコンテンツとしての可能性を持っており、検討していく必要がある。

ウ 他自治体の事例では、乳幼児でも美術館における色や形といった造形要素や音声、人的刺激等に反応があった。

(4) 世界こども美術館との連携

ア 現在の美術館活動と新施設の活動をどのように連携させていくかが重要である。

イ 創作活動において学校で学ぶ水墨画や神楽の道具づくり等、「歴史」に関わるものづくりが実施できないかと考える。

ウ ミュージアムスクールのような活動を歴史を切り口に新施設で実施するのか、美術館と協働で行うのか等、様々なパターンが考えられる。そういった活動を実施していくためには、浜田市教育研究会社会科部会と学芸員が連携する必要がある。

(5) 市民との連携

ア 市民連携は市民からの自発的な声が挙がるのが理想であり、関係する団体との連携が重要であろう。

イ 子どもを考えた時に、「家庭」というキーワードも付随してくる。家族もターゲットとして考えると違う視点もでてくる。

ウ これからの博物館のあり方として、地域や高齢者、ボランティア等も主体者の一人として位置付けていくことが求められる。

(6) タブレット等の活用

ア タブレットは単なるツールではなく、新たな場所としてデザインできる可能性がある。館での学びだけではなく、学校での事前・事後学習等、一連の中で活用していく想定でデザインする必要がある。

イ タブレット利用は一つの柱となりうる。一方で、実物に触れ、体験させることも重要であり、相反する事柄を上手く融合させる必要がある。

ウ 展示スペースは限られると思うので、QRコードなどを用いて映像が見られる等できたら良いと思う。スマートフォン対応とすれば、一般の方も利用できる。